

令和〇〇年度
学位論文

卒業論文のタイトルをここに書く

～ここはサブタイトル～

表紙は大きめの字で。本文の書式は以下の通り。
（「ファイル」―「ページ設定」で設定すること。

- ・ 余白は上下左右 30mm
- ・ 1行 33文字、1ページ 35行。
- ・ 本文は 10.5ポイントの明朝体。
- ・ 章ごとに「改ページ」を入れる。
- ・ 本論のみで2万字以上。これが最低条件。「本論のみ」とは、1章から結論の章までを指し、「謝辞」「目次」「参考文献」「巻末資料」などは含まない。また、本文中に引用が多い場合は、字数に含めない場合がある。（ちなみに、このファイルは本文のみで約 5000 字しかない。）

法政大学 文学部
日本文学科 99A3857

法政 太郎

（指導教員：尾谷昌則）

目次

目次の作成は、以下のページで説明されている「スタイルの設定」「アウトラインの設定」「目次の挿入」を参照のこと。

<http://www.eurus.dti.ne.jp/~yoneyama/Word/ouyou/w-mokuji.html>

第 1 章	テーマを決めよう	1
第 2 章	先行研究を調べよう	3
2.1.	論文ですべきこと	3
2.2.	具体的に紹介・比較検討・批判をしよう！	4
2.3.	研究の論点を明確にしておこう！	4
第 3 章	自分で分析してみよう	5
3.1.	分析を紹介・予告をしておこう！	5
3.2.	ポイントごとに分けて論じよう	5
3.3.	主張の根拠は複数あるとよい	5
3.4.	良いテーマを選べば、必ず研究は広がる	6
第 4 章	結果をまとめる	7
卷末資料		10
参考文献		9

何か資料がある場合は、最後に掲載。複数ある場合は、「資料 1」「資料 2-1」「資料 2-2」のように項目で分ける。本文中で触れる場合は、「卷末資料 2-1 を参照」のように書く。

章やセクションの番号自動的に連番にするには、下記サイトの「アウトラインの設定」を参照。（「スタイルの設定」もしておくとよい）

<http://www.eurus.dti.ne.jp/~yoneyama/Word/ouyou/w-mokuji.html>

第1章 テーマを決めよう

第1章の目的は、「テーマの紹介」を行うことです。そのテーマの背景、どうして面白いのか、何に役立つのかなどを書くが、研究の最終目標である「何を明らかにしたいのか」は欠かせない。そして、それを明らかにするためにどんな研究、調査、分析をして、どういう結論に至ったのかを書く。最後の段落は、論文の構成を紹介する。

戸田山(2002)でも述べられているように、論文には必ず<問い><主張><論証>の三要素がある。<問い>とはいわゆる研究テーマであり、それについて自分で考え出した答えが<主張>、つまり論文の結論になる。テーマとは<問い>であるから、疑問文で表現したものが最も簡潔かつ明瞭なテーマになる。例えば、「形容詞接尾辞の「ぼい」が推量の助動詞に変化したのは何故か」や、「「お返事」と「ご返事」はどう違うのか」である。このように問題意識を明確化すれば、自ずと<主張>も明確になるであろう。

ただし、論文が論文たり得るためには、様々な根拠を挙げて、自分の<主張>がいかに正しいかを論じなければならない。それが<論証>であり、テーマや利用する理論によって様々な論証法が考えられる。そこで本稿では、「副詞「全然」は本当に肯定表現化したのか」というテーマを設定し、論文の書き方と言語分析の一例を紹介したい。¹

一般に、論文の第一節ではテーマの紹介を行う。ここで取り上げる副詞「全然」は、肯定文でも否定文でも使用できる（下例(1)参照）。しかし、肯定文と共起したものに対する違和感は、(2)にも見られるように、以前から指摘されている。

※ 本文と例文の間は1行空ける。

- (1) a. 全然面白くないよ。
b. 全然面白いよ。
- (2) 近頃気になるのはよく、「全然よくできるの。」式のコトバを使ふことである。「全然」とは否定の意味であつて、「全然出来ない。」とか、「全然駄目だ。」と云ふのならわかるが……（小堀杏奴「思ひ出」『言語生活』1953年3月）

例文は、必ず丸括弧付きの数字（投資番号）で簡条書き。

本論からページ番号を入れるために、「セクション区切り」を使う。

¹ 本稿で用いる書式は、言語学分野の学術雑誌に掲載される一般的な論文の書式である。文献の引用法、例文の提示法、参考文献の書式に至るまで、本稿の書式を悉く真似てもらいたい。

現代では、「全然」が肯定文と共起する(1)bのような用例もかなり容認されている。しかし、「全然」が本当に肯定の意味で使用されているのだろうか。「そんなこと、私にはとても出来ない」という時の「とても」は、否定を強調する副詞であったが、現在では中性化して「とても美味しい」のような肯定文でも問題なく使用される。「全然」も同じように中性化しているのだろうか。

そこで小稿は、上記の問題について議論を進めることで、4年生諸君に卒業論文の基本的なフォーマット（書式、論の構成など）を示すことを目的とする。論の構成は以下の通りである。第2章では、論文にとって重要な先行研究の扱いについて取り上げ、それらと比較・検討することで研究のポイントを明確化する必要性について述べる。第3章では、例文や図表の出し方を紹介すると共に、自分の分析をする上でいくつかの論拠が必要であることについて述べる。最後の第4章では、本稿で説明したことをまとめた上で、良い論文の条件について紹介する。

第1章の最後には、論文の全体的な構成を必ず書くこと。

第1章の最後に、論文の目的（この論文で何を明らかにしたいのか）を書く。ただし、ここでは大雑把で良い。詳しくは第2章の最後で書く。

第2章 先行研究を調べよう

章ごとに「改ページ」をする。章のタイトルは18ポイントの太字で。

章はサブセクションに区切り、見出しは14ポイントくらいの大きさで。「アウトライン」の設定をしてください。

第2章の目的は、「先行研究」を批判的に紹介しながら、「すでに明らかにされたこと」と「まだ解明されていないこと」を整理することです。そして、後者がそのまま自分の研究課題（リサーチ・クエスチョン）になる。

2.1.論文ですべきこと

一般的な論文では、第二節で先行研究の紹介と検討を行い、問題点を整理する。先行研究とは、同じテーマで既になされた研究である。論文として活字化された時点で、その論文の主張（根拠としたデータなども含む）は一種の特許権を持つため、自分の分析や主張と関係がある場合は、論文中で紹介しなければならない。その上で、以下の点について検討する必要がある。²

ここ重要！左端を綺麗にそろえる！「ぶら下げインデント」を設定！

- ① 先行研究の主張や根拠に誤りがないか検討する。
- ② 先行研究の主張を比較し、食い違いがないか検討する。
- ③ 先行研究でまだ触れられていない問題や、未解決の問題がないか検討する。
- ④ 先行研究の主張に同意する場合は、挙げられている根拠が本当にそれで十分かどうか検討する。

要点は、ナンバーを付けて箇条書き。

「字下げ」する。「インデント」(の設定)を使う。

以上の4点について何か不備な点が見つければ、それについて徹底的に研究すればいい。その研究成果がそのまま自分の主張となり、論旨の明快な論文になることであろう。しかし、万が一何も見つからなかった場合は、自分が口を挟む(=研究する)余地が無いということであり、研究テーマを変更せざるを得なくなる。³

論旨に直接関係ない情報などは注で入れる。

² 図書館のOPACで検索した市販書籍を読むだけで満足してはならない。その多くは、専門知識の概略を知るための概説書でしかなく、①～④のような検討はなされていない。新書や匿名ウェブサイトなどはそれ以下である。良い論文を執筆するためには、①～④について触れている良質の学術論文を読む必要がある。そのためには、MAGAZINE PLUSやCiNiiといった学術文献データベースで論文を検索してもらいたい。

³ ただし、非常に珍しいユニークなテーマや、つい最近出てきた新しい表現がテーマの場合は、先行研究が存在しないということもあり得る。そのような場合は、自分の研究がパイオニアになるため、オリジナリティの高い論文になることが期待できる。

2.2 節では、文献の引用法を何種類か入れておいた。基本的には「名前（出版年：ページ番号）」とする。引用文の末尾に括弧で入れてもよい。

2.2.具体的に紹介・比較検討・批判をしよう！

語彙研究においては、辞書が最もポピュラーな先行研究である。『日本国語大辞典』（第二版 2000:108）の「全然」の項目には「否定表現を伴わない...（中略）...、「とても」「非常に」と同様、単なる程度強調」とあり、同様の見解は鈴木(1993)にも見られる。また、新野(1997:278)は、「全然」が「完全に、100%」を表す副詞でしかないため、肯定文と共起しても何ら問題ないと指摘している。

しかし、金田一(1966)は「全然いい」も、「全然欠点がないくらいいい」の意味で、否定の意味はやはり隠れて存在しているように思う（金田一 1966:132）」と指摘しており、上で紹介した見解とは一線を画している。本稿での主張も、基本的にはこれと同じであるが、金田一はこれ以上の言及をしておらず、根拠となる事実も提示していないため、議論としては不十分であると言わざるをえない。

引用法を参考に

2.3.研究の論点を明確にしておこう！

さて、以上の話をまとめよう。第2章の最後では、以下のことを整理しなければならない。他にも、2つの先行研究の間に主張のズレが見られる場合は、どちらが正しいのかを研究する余地が生じる（上記項目②に相当）。また、自分と同じ主張をしている先行研究でも、その根拠が不十分である場合には、自分が新たな根拠を示すことで一定の研究成果として認められることになる（上記項目④に相当）。こうやって、自分が口を挟む（＝主張する）余地を探すことが、良い研究を進める上で欠かせない第一歩になる。そのためには、教科書に書かれていることを鵜呑みにするだけの勉強法は卒業し、時には教授の講義内容すら疑い、自ら代替案を考えてみるという前向きな批判的精神を大学3年生までに身につけておく必要がある。

ここでは、「全然」について以下の様な疑問が浮かび上がってきた。

- 〈1〉「全然」は本当に肯定の意味を獲得したのだろうか。
- 〈2〉「全然」は「非常に」や「とても」と同じ程度強調なのだろうか。

次章では、これらの疑問について論じる。

第10章の最後で、先行研究を読んでも疑問が残った点を簡条書きでまとめ、第3章（自分の分析）へとつなげる。

第3章 自分で分析してみよう

3.1.分析を紹介・予告をしておこう！

先行研究を紹介したら、次はいよいよ自分の分析と主張を提示する番である。既に、第二節で先行研究の検討を終えているため、解明すべき問題点も十分に絞り込まれているはずである。「全然」に否定の意味が残っているという主張をする場合であれば、**2つの根拠が考えられる。順を追って、それらを見ていくことにしよう。**

この先の論を予告する文を入れる。

3.2.ポイントごとに分けて論じよう

1つのセクションで1つの内容！

「全然」に否定の意味が残っていると考える**一つ目の根拠**は、文の述語を省略した場合に、解釈が否定に限定されてしまうという事実である。

- ↕
- (3) 友人：「この漫画、面白いね。」
自分：「{*うん／いや}、全然。」⁴

図表や例文を入れるときは、本文と1行空ける。
それ以外は、同一セクション内で行間は空けない。

↕

上の例では、「うん」という肯定の相槌は不自然に感じられるが、「いや」という否定・反論であれば自然に感じられる。このようなコントラストがはっきりと見て取れることから、「全然」は極めて否定的なニュアンスで使用されているということが分かる。

3.3.主張の根拠は複数あるとよい

「全然」が否定のニュアンスを残していると考えられる**二つ目の根拠として**、「全然」の使用実態が挙げられる。一見すると肯定的なニュアンスを表すように見える例でも、完全に肯定的なニュアンスで使用されているわけではなく、どの事例でも「全然」は文脈想定を否定していると考えられ

⁴ 言語学の論文では、ある表現が（文法的に、もしくは意味的に）不自然な場合は「？」や「??」を、完全に許容できない場合は「*」を付すのが世界共通の表記法である。

る。それを実証するため、インターネットの掲示板で「全然」が肯定文で使用されている 100 の会話事例を抽出し、その文脈を調査したところ、その全てが相手の主張なり文脈想定を否定するための発話であった。以下はその一例である。ドライブしやすい山道に関する話をしている例であるが、「R285の方が走りにくい」という文脈想定が形成されつつある場面で、160の発言者がそれを否定している。

(4) 155: R285 ってきついんですか? R105 の山道とどっちがきついですか?

156: 285の方がはるかにきつい

160: R285 ってそんなに走りにくいかなあ? 全然ラクチンだと思うけど・・・。

「全然」が文脈想定を否定しているという本稿の主張が正しければ、否定されるべき文脈想定が無い場面では「全然」が使用出来なくなると予想されるが、実際にその通りになる。

(5) 【友人と偶然街で会った時に、会話の第一声として】

??「その髪型、全然かわいいね。」⁵

3.4. 良いテーマを選べば、必ず研究は広がる

ここでは2つの根拠を挙げたが、実際にはもう少し多角的に分析する必要がある。例えば、否定するという行為はネガティブ・ポライトネスの一種であるため、ポライトネス理論 (Brown & Levinson 1987) の観点から分析することも可能であろうし、文解釈という語用論的観点から分析するなら関連性理論 (Wilson & Sperber 1986^{1st}/1995^{2nd}) も必要になる。さらに、Traugott(1982)のいう文法化や言語変化といった観点から論じても面白い。良いテーマを設定し、真摯に分析を進めれば、研究は様々な方向・関連分野へ広がって行くので、論文の内容はいくらでも膨らませることができるであろう。

⁵ もしこれが容認可能になるとすれば、それは「以前の髪型よりも、現在の方が遙かに良い」という解釈の場合であろう。しかし、2つのものを比較するという行為には、暗黙の内に否定が含まれているため、いずれにしても本稿の主張が裏付けられることになる。

仮に、何らかの実態調査などを行ってれば、膨大な統計データが手元にあるはずである。そのデータを精査すれば、当初の目的（最初に設定したテーマ）以外にも、いくつか面白い事実が判明するかもしれない。そうすれば、研究内容はさらに膨らむ。その場合、章を改めて論じればよいつまり、自分の分析を提示する章が第 3 章と第 4 章の 2 本立てになるということである。

最後になったが、図や表を入れるときは、以下のように「図 1」や「表 1」いう「図表番号」を入れることを忘れずに。

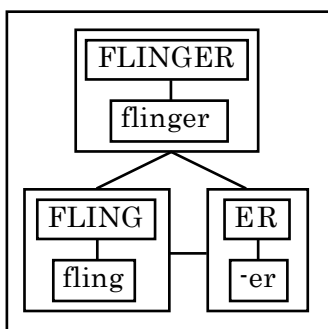


図 1

	直示の there 構文	存在の there 構文
a. 付加疑問文	×	○
b. 繰り上げ構文	×	○
c. 否定可能性	×	○
d. 従属節への埋め込み	×	○
e. Here との交替	○	×

表 1

図や表を入れる際は、例文を入れる場合と同じで、本文と図表の間を一行空けるのが基本である。

第4章 結果をまとめる

さて、最後は自分の研究をまとめるセクション、いわゆる結論である。本稿では、テーマ設定、先行研究の検討、論証の方法などについて説明したわけであるが、本稿の構成も参考にしてもらいたい。典型的な論文の構成は、第一節がテーマ紹介、第二節が先行研究の紹介と問題点の指摘、第三節が自分の分析、第四節が結論である。自分で研究したことが多い場合は、第三節だけでなく、第四節（さらに第五節）も充ててよい。ただし、本を読んで仕入れた知識をダラダラと披瀝することが研究ではないので、気をつけてもらいたい。研究の善し悪しは、テーマの面白さ、主張の正しさ（およびユニークさ）、そして論証の正しさである。論証法はテーマや理論によって多岐にわたるため、その都度指導教員に相談しながら研究を進めてもらいたい。

筆者の名前順（ABC 順）で並べる。『』は図書名、「」は論文・記事名に使用する。その他の書き方は以下を参照。

参考文献

- Brown, P. & S, C, Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 柄沢 衛 1977. 「「全然」の用法とその変遷 — 明治二、三十年代の四迷の作品を中心として」、『解釈』Vol.264, pp.38-43.
- 金田一春彦 1966. 『新日本語論・第三編』筑摩書房
- 新野直哉 1997. 「“全然” + 肯定」について」、佐藤喜代治編『国語論究 第6集 近代語の研究』pp.258-281. 明治書院
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986^{1st}/1995^{2nd}) *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell. (内田聖二他訳『関連性理論 — 伝達と認知 — 第2版』研究社)
- 鈴木英夫 1993. 「新漢語の受け入れについて — 「全然」を例として —」、松村明先生喜寿記念会（編）『国語研究』pp.428-449. 明治書院
- 戸田山和久 2002 『論文の教室—レポートから卒論まで』NHKブックス
- Traugott, E. C. 1982. “From Propositional to Textual and Expressive Meanings: Some Semantic-Pragmatic Aspects of Grammaticalization”. in Winfred P. Lehman and Yakov Malkiel eds. *Perspectives on Historical Linguistics*. pp.245-271. Amsterdam: John Benjamins.

参考辞書

- 『三省堂国語辞典』 第七版（2014年、三省堂）
『新明解国語辞典』 第七版（2011年、三省堂）

参考サイト

- Twitter <https://twitter.com/>
現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)
<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>
ワードの使い方 <https://www.becoolusers.com/word/index.html>

2行に渡っても左端が綺麗に揃うように、「ぶら下げインデント」を設定する。

必要に応じて「参考辞典」「参考サイト」などを設ける

卷末資料

※

独自にデータを収集した人は、そのデータ、統計、グラフなどをここに添付する。例えば広告のキャッチフレーズなどを研究した場合は、実際の広告やポスターなどを縮小コピーしたものを添付する。多数ある場合は、〈資料 1〉。〈資料 2〉のように整理して提示する。ある言語表現の使用事例などを採取した場合は、その採取事例（の一部、特に論文での議論に関係ある事例など）をリスト化して提示する。